



最近の原油相場の動向

黒岩 達也

ポイント

- 6月2日のOPEC総会では、1月に経済制裁が解除されたイランの反対で生産量の上限設定が見送られたが、その後も原油価格は堅調に推移している。
- この背景には、OPECの生産余力の低下、カナダやナイジェリアで不測の事態などがある。
- 加えて、インドなど新興国の需要増、米国のシェール・オイルの生産停滞もあり、世界の原油需給はタイト化しており、当面、原油価格は40~60ドル程度で安定的に推移する可能性が高い。

はじめに

6月2日に開催された石油輸出国機構（OPEC）総会では、一部の加盟国が需給引締めに向けて生産量の上限設定を主張した一方、1月に経済制裁が解除され、増産を続けていたイランが生産上限の設定に強硬に反対したため、協調体制の構築に至らなかった。

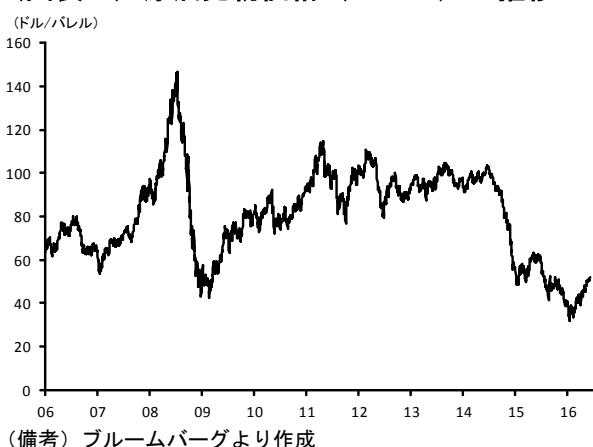
1. 原油需給は引締まり傾向

ただ、OPEC諸国に悲壮感はない。国際的な代表的油種であるWTI（ウェスト・テキサス・インターミディエート）は、1月20日に終値ベースで1バレル=31.77ドルまで低下したが、その後、原油価格は上昇に転じ、今回の総会後もWTIで50ドル前半での取引が続いている（図表1）。

この背景には、①2月16日、世界的に生産シェアが大きいサウジアラビア、ベネズエラ、ロシアが増産凍結で合意したこと、②3月末には中国の2大石油会社のペトロチャイナ、シノペックが減産を決定したこと、③カナダ西部のアルバータ州で発生した大規模森林火災の影響で、隣接する油田が生産できない状況となっていること（平均日量120万バレルの損失）、④ナイジェリアでは武装勢力が石油施設を攻撃し、減産を余儀なくされていること（日量（日量20万バレル程度）、などがあり、一時的な要因もあるが、今年春以降、原油需給は引き締まっている。

加えて、OPECの生産量をみると、今年4月の段階では、各国ともに、ほぼ安定的な生産能力の上限に近い水準に達しており、実態として増産余力があるのはサウジアラビアだけと言える（図表2）。サウジアラビアのファリハ・エネルギー産業鉱物資源相は「我々は（消費国の）備蓄の多さを懸念している。然るべき水準の供給不足が安定して続く必要がある」と発言しており、当面、サウジアラビアは増産する意思がないことを明らかにした。

（図表1）原油先物価格（WTI）の推移



（図表2）OPECの増産余力

（単位：百万バレル/日）

	生産量 (16年4月) (A)	安定的 生産能力 (B)	増産余力 (B)-(A)
アルジェリア	1.09	1.12	0.03
アンゴラ	1.77	1.81	0.04
エクアドル	0.53	0.55	0.02
インドネシア	0.74	0.74	0.00
イラン	3.56	3.60	0.04
イラク	4.36	4.40	0.04
クウェート	2.73	2.83	0.10
リビア	0.36	0.40	0.04
ナイジェリア	1.62	1.90	0.28
カタール	0.66	0.67	0.01
サウジアラビア	10.19	12.20	2.01
UAE	2.82	2.93	0.11
ベネズエラ	2.33	2.46	0.13
OPEC合計	32.76	35.61	2.85

（備考）IEA『Oil Market Report』16年5月号より作成

一方、イランは総会で増産意欲を示したが、現段階ではイランの増産余力は日量4万バレルにとどまっており、増産体制が整ってくるのは秋以降になる公算である。

このため、OPECの供給量は現時点の日量3,276万バレル（天然ガソリン（NGL）を含めると3,930万バレル）で推移するとみられる。

(図表3) 世界の原油需給の推移

(単位：百万バレル／日)

	15.1Q	2Q	3Q	4Q	15年平均	16.1Q	2Q	3Q	4Q	16年平均
総需要	93.6	94.1	95.7	95.5	94.7	95.0	95.3	96.7	96.8	95.9
米州	24.2	24.1	24.7	24.4	24.4	24.2	24.3	24.8	24.6	24.5
中国	11.2	11.4	11.5	11.5	11.4	11.5	11.7	11.8	11.9	11.7
欧州	13.4	13.6	14.1	13.7	13.7	13.5	13.7	13.9	13.5	13.7
日本	4.8	3.9	3.9	4.2	4.2	4.5	3.7	3.8	4.2	4.0
総供給	95.0	96.3	96.9	97.3	96.4	96.4	95.8	96.1	96.2	96.1
OPEC	37.7	38.9	39.1	39.2	38.7	39.3	39.3	39.3	39.3	39.3
米州	20.0	19.6	20.1	20.1	19.9	19.8	19.1	19.2	19.4	19.4
ロシア	14.0	14.0	13.9	14.1	14.0	14.2	14.1	13.9	14.0	14.0
需給バランス	1.4	2.2	1.2	1.8	1.7	1.4	0.5	-0.6	-0.6	0.2

(備考) 1. 16年第2四半期以降はIEAによる予測。OPECの供給量は16年第1四半期と同水準で推移すると仮定(NGLを含む)

2. 米州は米国、カナダ、チリ、メキシコの4か国。欧州5か国はドイツ、フランス、英国、イタリア、スペイン

3. IEA『Oil Market Report』16年5月号より作成

2. 米国のシェール・オイルの動向がカギ

国際エネルギー機構（IEA）の予測をベースに原油需給を予測すると、16年の需要量は日量9,590万バレルと15年の日量9,470万バレルから1.3%増加する見通しである（図表3）。一方、16年の供給量はOPECが16年第1四半期と同量の生産を維持すると仮定した場合、日量9,610万バレルと、15年の日量9,640万バレルから0.3%減少する計算となる。この結果、7～12月の原油需給はタイトになる見込みである。

需要面からみると、IEAは中国やインドなどの新興国の原油需要が回復するとしており、特にインドは経済の好調から前年比で8.8%増加する予想である。供給面では、前述のとおり、OPECの生産余力の低下、ロシアなどの増産凍結などが供給の低位安定要因となっている。

今後、供給面で大きなカギを握るのは米国の生産動向である。米国の油田の稼動リグ数は14年10月にピークを迎えた後、原油価格の低下とともに減少してきている（図表4）。

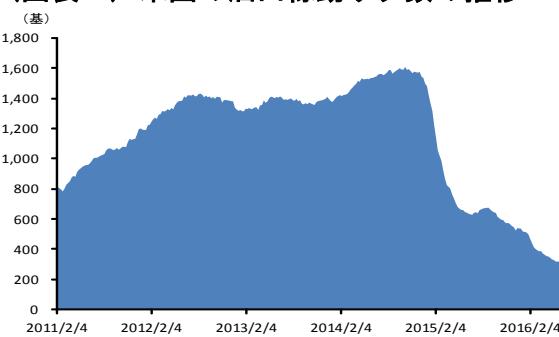
米国の原油生産の主流は、従来型原油ではなく、シェール・オイル（地下深くの泥岩（けつ岩＝シェール）の層に含まれている石油の一種）である。その発見・生産コストは31.2ドル/バレルとされ、中東の14.85ドル/バレルを大きく上回っている（図表5）。加えて、シェール・オイルの場合は生産開始から生産のピークを迎えるまで約2年とされ、その後は徐々に生産量が低下する。このため、常に有望な油田を探さねばならず、自噴する中東原油に比べてコストがかかる。

シェール・オイルを継続的に生産するには原油価格が最低でも50～60ドル/バレルの水準にあることが望ましい。いまの価格レベルが保たれれば、シェール・オイルの稼働率は徐々に上昇してくるであろうが、大幅な増産は自分の首を絞めることになる。

3. 当面、原油市況は安定した推移に

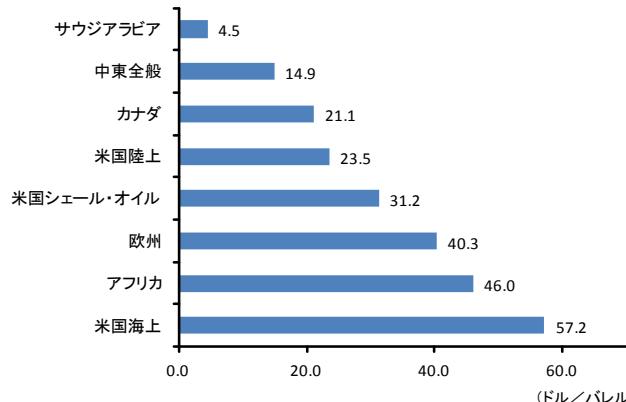
当面、原油価格はWTIで40～60ドル/バレ

(図表4) 米国の油田稼動リグ数の推移



(備考) Baker Hughes 資料より作成

(図表5) 主要産油国の油田発見・生産コスト



(備考) 中東協力センターニュース 14年8月9日号『シェール・ガス革命でも競争力のある中東産油国石油の魅力』より作成

ル程度で安定的に推移する可能性が高く、14年まで続いた100ドル超の高水準には戻らないと予想される。

40～60ドル/バレルのレベルでは、サウジアラビアを中心とするOPEC諸国の原油収入が増加し、財政収支が黒字化する。また、米国のシェール・オイルの生産がある程度抑制され、原油需給がほぼ均衡した状態が続く。

原油価格の低位安定は、日本経済にも好影響をもたらそう。ガソリン、暖房油、ケロシン（航空燃料）など、石油関連製品の価格安定が続けば、日本の企業や消費者にはコストメリットがある。

以上